



権現堂と津子王丸像(画像提供 権現寺)

第五号 平成28年8月1日 朱雀の権現堂

『太平記』卷八(四月三日合戦の事)にその名が見える“朱雀(しゅしゃか)の地藏堂”とは、清光山成就院権現寺の境内にある権現堂のことで、聖徳太子作と伝わる勝軍地藏を祀っている。権現堂は、かつては朱雀大路七条南西にあったが、明治44年に官有京都停車場(現JR京都駅)拡張工事のため、現在地(京都市下京区朱雀裏畑町)に寺とともに移ってきた。

権現堂は、森鷗外が著した安寿と厨子王の物語『山椒大夫』にも登場する。

中世に始まったとされる大衆芸能の説経節に『さんせう太夫』という演目があり、その中で、丹後由良の山椒大夫のもとから逃れてきた厨子王が、国分寺の僧の助けにより朱雀の権現堂に辿り着いたという場面が語られてきた。小説『山椒大夫』はこの『さんせう太夫』の正本(しょうほん)を元としており、森鷗外も「山城の朱雀野に来て、律師は権現堂に休んで、厨子王に別れた」と書いているのである。(律師とは丹後国分寺の僧)

また、権現寺蔵『朱雀権現堂縁起(火印地藏菩薩事 世俗号金焼地藏)』は、厨子王が朱雀の権現堂に着いたとき、山椒大夫によって額に押されていた金焼の疵が消え、肌身離さず持っていた守り袋の中の地藏菩薩の尊顔に金焼の跡があった、という霊験譚を伝えている。

権現堂の本尊勝軍地藏の脇にはその「身代り地藏菩薩」と、後に立身出世した姿の「津子王丸(つしおうまる)(厨子王)像」が安置されている。なお権現堂は非公開である。

先日、取材のために同寺を訪れたとき、境内に「さんせう太夫」を語る往時の説経節の音が聞こえてくるような気がした。

NPO法人京都観光文化を考える会・都草

特別顧問 坂本 孝志